



鹿児島大学附属図書館



木脇啓四郎

きのわきけいしろう えがく

描く

幕末・明治の薩摩藩文化官僚の画業

鹿児島市立美術館  
鹿児島大学附属図書館  
合同企画展



# 鹿児島市立美術館・鹿児島大学附属図書館合同企画展 「木脇啓四郎描く一幕末・明治の薩摩藩文化官僚の画業」

鹿児島市立美術館

館長 渡邊 眞一郎

鹿児島大学附属図書館

館長 野呂 忠秀

鹿児島市立美術館と鹿児島大学附属図書館は、幕末から明治にかけて活躍した絵師、木脇啓四郎の足跡にスポットをあてた展覧会を開催いたします。

木脇啓四郎は明治16年に上野で開催された水産博覧会で鹿児島県勸業課から出品された『覧海魚譜』（白野夏雲編、1883）に二木直喜とともに生物画を描いた絵師でした。鹿児島湾（覧海）産魚介類三百余种の図鑑ともいえるこの魚譜に収められているのは、採集直後の標本を色鮮やかに描写した日本画であり、交通も不便で標本保存技術のない明治初頭の作としては驚嘆に値するものでした（今井貞彦「覧海魚譜の刊行に際して」、『新編覧海魚譜』、1979年）。

古来西欧では、採集した標本を博物館に送る採集者や、その標本を整理する学芸員（Curator、図書館におけるLibrarian（司書）に相当）と、専門の絵師が博物学の研究を支えてきたものでした。博物学者は、このように恵まれた研究環境の中で悠然と研究に没頭し論文を発表していました。その中で、絵師の果たす役割は大きく、論文や図譜の挿絵として“写真よりも本物らしく見える”動植物画を描き、その隅にそっと署名を入れることで自らの存在感を後世に残したものでした。わが国でもかつては博物館や大学の生物分類学研究室にはこのような絵師が技術職員として勤務していたものです。

薩摩藩主の知的好奇心が育んだ江戸本草学に端を発し、学術的に貴重であるのみならず高い芸術性の香りを漂わせた生物画を描いた木脇啓四郎の画業をご堪能ください。

本合同企画展の開催にあたりまして、ご協力いただきました鹿児島県立図書館、沖縄県立図書館、東京国立博物館、尚古集成館、一般財団法人共研舎、菅原神社（磯天神）、木脇祐二氏、竹本博義・悦子氏、中島正國氏、山下廣幸氏、上川路直光氏、栗国恭子氏、深港恭子氏、小瀨亜由美氏に対しまして、厚く御礼申し上げます。

## 目 次

### I

木脇啓四郎の生涯・・・1

木脇啓四郎略年譜・・・3

### II

藩政期の啓四郎・・・4

四条派の絵師税所文豹と啓四郎・・・4

絵画以外の藝道修業・・・4

甲冑製作と古器調査・・・5

薩摩藩版の製作・・・6

### III

近代日本と啓四郎・・・7

博覧会と啓四郎・・・7

### IV

勸業政策と啓四郎・・・7

『薩隅煙草録』・・・8

『覧海魚譜』・・・9

啓四郎と沖縄・奄美・・・10

啓四郎の文化的営み

—啓四郎が鹿児島に遺したもの—・・・11

慶長之役合戦図屏風の復元・・・11

啓四郎と中島信徴・・・12

桜谷の景観と

磯天神拝殿の格天井百草図の復元・・・12

その他の業績・・・12

啓四郎と和歌・・・13



# きのわき けいしろう 木脇啓四郎描く

—幕末・明治の薩摩藩文化官僚の画業—

鹿児島大学法文学部教授 丹羽謙治

木脇啓四郎は、幕末から近代にかけて一貫して技藝を通して薩摩藩（島津家）、鹿児島県、そして木脇家のために尽した。その対象は、茶道、花道、甲冑製作、古器の調査研究、焼物、出版、絵画、……と多方面にわたり、時代の要請に良く応え、才能を存分に発揮した啓四郎は、まさに薩摩藩の「文化官僚」とでも呼ぶべき存在であった。

しかしながら、彼の多彩な業績に比して、木脇啓四郎の名は必ずしも知られているとは言い難く、絵師の側面に限っても、薩摩藩の絵師の列伝として名高い井上良吉編『薩藩画人伝備考』にも取り上げられていない。今回、鹿児島大学附属図書館に子孫の方から寄贈いただいた資料（木脇家文書）を基とし、各地に残されている啓四郎に関わる資料を一堂に集め、展示することで、彼の生きた激動の時代と時代の要請によく応じた彼の業績を回顧してみたい。なお、啓四郎の名前については、諱に祐尚（後に祐業）、通称に仁平次、藤淵、啓阿弥、号に桃蹊など種々存在するが、本図録では年代に拘らず戸籍上の名の啓四郎を使用することにする。

## I 木脇啓四郎の生涯

### 木脇家

木脇家は、もとは日向国の伊東氏の一族であり、のちに島津氏に仕えることになった。本家の木脇家に残る連歌懐紙では、伊東（木脇）祐昌が薩摩藩初代藩主の家久、山田有栄らの家臣と連歌を行っており、江戸初期には藩主に近侍していたことが分かる。島津家の中でも古い格式を持つ家柄であった。しかし、時代が下るに従い、徐々に石高は減少、祐之の代に城下の中心部にあった屋敷を売却し、城下から離れた唐湊の別邸を本邸とした。家格は小番（他藩の馬廻に相当）である。

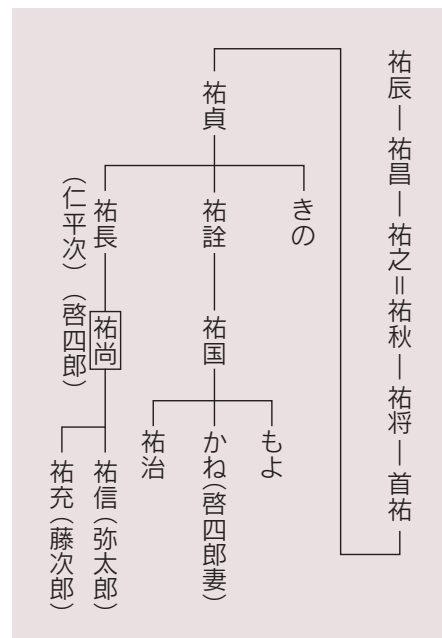
### 父、仁平次祐長

啓四郎の父仁平次祐長は、天明5年（1785）に木脇家の分家を立てることを藩主から許可された。寛政12年～享和2年（1800～02）見聞役代として沖永良部に詰めたが、文化13年（1816）再度、見聞役として同島に下った。

啓四郎は、この時仁平次と島妻の米松という女性との間にできた子供であった。ところが、啓四郎2歳の文化15年2月4日、仁平次は消化器系の癌にかかり病死する。死を覚悟した仁平次は親類宛に詳細な遺言書を残した。啓四郎は島で養育し10才頃に鹿児島に上らせること、鹿児島の妻（小倉氏）と娘（啓四郎の姉）にはこれまで通り仁平次の建てた家に住むこと、その他金銭面の指示などである。この間の事情について啓四郎は、晩年に認めた『萬留\*』の中で、幼少期に見聞きした風景や人物、体験したことなどを印象深く書き残している。この資料は近世薩摩の人間が書いた早い時期の自叙伝としても評価することができるものである。

啓四郎は父仁平次を直接知ることはなかったが、後に母（小倉氏）から父のことを聞き、その影響を受けたようである。仁平次は、経済感覚に優れ、将来金がものをいう世の中になると考え、啓四郎の幼名を「金時」と名付けたほどの開明的な人物であった。また、啓四郎の尚古趣味や、南朝最眞などは時代の影響もあるが父仁平次に由来するものでもあった。

\* 原口泉・丹羽謙治他編『薩摩藩文化官僚の幕末・明治』（岩田書院、2005年）に翻刻。



木脇家略系図（江戸時代）

## 鹿児島上り・御数寄屋茶道・花道師範

啓四郎は8歳の時に仲仁という人物に連れられて、鹿児島に上り、唐湊の木脇本家に入る。10歳になると上荒田郷中で、薩摩藩の独特の地域教育を受ける。本家には後継ぎとなる男子がなかったので、将来、啓四郎と娘のかねを結婚させて本家を継がせる予定であったらしい。ところが、文政13年(1830)に本家に長男祐治が誕生したため、啓四郎は鹿児島城に茶坊主として出仕することになる。本家から遠ざけられた形の啓四郎だが、鹿児島城に上がることによって、多くの薩摩藩士の人脈を築き、多彩な業績を残す基盤ができたといってもよいだろう。

啓四郎は、松山隆阿弥に池坊流の花道を学び免許皆伝をし、鹿児島の花頭(師範)となった。また、甲冑製作を法元六左衛門に学んだが、これはのちに江戸詰の際、有職故実家や甲冑師に学ぶことに繋がっていく。また、若いころ、四条派の絵師でもあった税所龍右衛門篤之に絵を学んでいる(p.4参照)。絵を学んだことは、花道の技を習得するのに大いに役に立ったという。

## 甲冑製作・藩版・大奥

天保14年(1843)に初めて公用で京都、江戸へ赴いた。薩摩藩では当時調所広郷により藩の財政立て直しが、幕府では老中水野忠邦による天保の改革が行われている頃であった。6年間の江戸詰で、啓四郎は故実に即した甲冑の製作法を学ぶよう海老原清熙から命を受け、習得に励んだ。また、幕臣の有職故実家、栗原信充(柳庵)に弟子入りをした(p.5参照)。

弘化4年(1847)頃江戸詰を終え鹿児島にもどり、甲冑製作所の主取(責任者)として藩主や上級武士の鎧を初めとして種々の古式に則った武具を製造していく。研究熱心な啓四郎は、古い時代の甲冑などの武具を蒐集したり、絵図として記録に残したりする一方、当時廃れていた島津烏帽子を復元して、藩主斉彬に献呈している。また、藩内一門家や家老を務めた川上久封、新納久仰、鎌田正純、小松帯刀などの諸家に入出入りして、甲冑や武器の修復に当たっている。

時期は未詳だが、幕末には御広敷番頭として島津家の大奥に入出入りする。近衛家に嫁ぐ貞姫に茶道の教授をしたのもこの時代であろう。幕末には島津久光の命で師の栗原信充の著作の編集、出版に関わる(p.6参照)。



図1 | 啓四郎とその息子たち(弥太郎と藤次郎)。  
明治6年(1873)東京で撮影したもの。  
＜鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵＞

## 明治維新後の啓四郎

明治維新間近の慶応3年(1867)、啓四郎は突然郡奉行に任じられる。還俗したのもこれがきっかけであろう。それまでの藤洲、啓阿弥から祐尚と名乗る。その後は、長島や北薩摩、明治維新後には指宿・頤娃・山川、甑島を担当する地方官を歴任する。一方、明治4年～6年にかけて、明治政府の博覧会御用を務め、産物調査などに従事する(p.7参照)。

また、明治8年(1875)には島津家の事業を引き継いだ苗代川陶器会社の次長として陶器の販路開拓のため上海へ赴いた。

明治10年(1877)には西南戦争が起こる。薩摩は薩軍と政府軍に分かれて相まみえ、鹿児島は精神的にも物理的にも大きな痛手を蒙った。啓四郎は当時、小林郷(宮崎県小林市)の副区長であったが、息子の藤次郎(祐充)が薩軍に従軍し、大いに気を揉むことになる(長男の弥太郎祐信は明治7年に死去)。西南戦争後は、藤次郎が茶の生産法を学びに宇治・静岡などの産地を廻り、その後木脇家では一家を挙げて茶の生産に従事する。この時期から啓四郎は、農水産業についての近代的な知識の習得に努めるようになり、これが後に、沖縄の農事試験場勤務や唐湊鉱泉の発見にも繋がっていく。

明治10年代には、鹿児島県の勸業課の出版事業、明治19～24年にかけては、沖縄県の勸業課の出版事業に関与する(p.8～10参照)。明治の啓四郎は、日本の近代化、殖産興業政策とともに歩んだといえよう。隠居後も精力は衰えず、鹿児島の文化の発展に努力し続けた(p.11～13参照)。(丹羽)





木脇啓四郎略年譜 (明治 6 年以前の日付は旧暦。年齢は数え年。朱字は本図録に関わりの深いものを示す)

和暦	西暦	年齢	事 項	備 考
文化 14 年	1817	1	4 月 13 日、沖永良部島仮屋にて木脇仁平次祐長の長男として出生。母は米松。	天保の改革
文化 15 年	1818	2	2 月、父仁平次没。	
文政 7 年	1824	8	6 月末、仲仁なる人物に伴われ沖永良部を発ち、一旦琉球に渡り、大島、秋目、山川、喜入を経て鹿児島木脇本家に着く。	
文政 13 年	1830	14	4 月末、東郷助作の世話で表御茶道となる。	
天保 9 年	1838	22	池坊流免許皆伝。	
天保 11 年	1840	24	木脇かねと結婚。	
天保 14 年	1843	27	初めて京都・江戸に赴く（以後、6 年間江戸詰、甲冑製作法を習得）。	
弘化 4 年	1847	31	鹿児島にもどり、以後上滑川の甲冑製作所で武具製造の指揮をとる。	
嘉永 2 年	1849	33	＜嘉永朋党事件（お由羅騒動）＞	
嘉永 4 年	1851	35	江戸詰（嘉永 6 年まで）。	島津斉彬襲封
嘉永 5 年	1852	36	4 月 13 日～ 6 月 7 日、武器調査のため北関東、北越、東北を巡歴。	
嘉永 7 年	1854	38	鹿児島に戻り、甲冑製造。島津折烏帽子を藩主斉彬に献呈、採用される。	生野の変
安政 3 年	1856	40	武器調査のため領国内を巡回する（安政 5 年まで）。	
文久 3 年	1863	47	7 月 2 日、薩英戦争の兵火のため家を焼かれ、多くの家財を失う。	
元治元年	1864	48	1 月、久光の命で江戸に下り、栗原信充を鹿児島へ伴う。5 月鹿児島着。	
慶応 2 年	1866	50	11 月 15 日、令講義御取調掛として、隔日二の丸詰めを仰せ渡される。	戊辰戦争
慶応 3 年	1867	51	6 月、郡奉行を命ぜられる。この頃『軍防令講義』『官位令講義』刊。	
慶応 4 年	1868	52	11 月、樋脇・山崎・大村・靄田・佐志・黒木・宮之城・入来・蘭牟田の受持掛となる。『職原抄私記』刊。	
明治 4 年	1871	55	6 月 15 日、博覧会御用のため鹿児島出立、7 月 1 日東京着。	
明治 5 年	1872	56	5 月、産物調査のため日向国を巡回。8 月 15 日、13 等出仕博覧会取調掛を仰せ付けられる。『日隅薩巡回採摘品彙麁図』成る。	西南戦争
明治 7 年	1874	58	2 月 20 日、長男の弥太郎祐信没す。	
明治 8 年	1875	59	5 月、陶器の販売のため上海へ出張する。	
明治 10 年	1877	61	3 月、次男藤次郎祐充、薩軍に加わり出陣。	
明治 13 年	1880	64	3 月、藤次郎、茶の栽培・製造法習得のため京都・静岡・東京出張。	
明治 14 年	1881	65	2 月、『薩隅煙草録』刊。	
明治 16 年	1883	67	2 月、藤次郎、沖縄へ出張。3 月、『甕海魚譜』刊。『甕海魚譜』第 1 回水産博覧会で褒賞を受ける。	
明治 17 年	1884	68	4 月 15 日、菱刈・始良・桑原・曾於郡御用掛となる（18 年 4 月まで）。	
明治 19 年	1886	70	沖縄県泉崎村農事試験場勤務（24 年 2 月まで）。	
明治 20 年	1887	71	石澤兵吾（沖縄県勧業課長）より第 3 回内国勧業博覧会用として花草類の真写図の作成を依頼される（明治 23 年 4 月完成）。	
明治 22 年	1889	73	10 月、『琉球漆器考』刊。	
明治 24 年	1891	74	慶長之役合戦図屏風の復元を思い立つ。	
明治 25 年	1892	75	3 月 4 日、家督を藤次郎に譲り隠居。この年、唐湊で鉱泉を発見。	
明治 26 年	1893	76	北白川宮能久親王の来鹿を機に、磯に紅葉・桜を植林する計画を立てる。	
明治 31 年	1898	81	『萬留』執筆。	
明治 32 年	1899	82	2 月 23 日、没。南林寺墓地に葬られる（後に郡元墓地に改葬）。	



# II

## 藩政期の啓四郎

### 四条派の絵師税所文豹と啓四郎

税所<sup>(ママ)</sup>厚子君の亭主ハ、税所龍右衛門とて拙者の絵の師匠也。故に、京都にて近衛様御屋敷桜木町江有。爰へ屋しき番に居られたり。拙者も度々の上下に立寄りざるハなし。

—『萬留』—

木脇啓四郎は『萬留』の中で、自らの絵の師は税所文豹（?～1852）であると述べている。文豹は名を篤之、龍右衛門と称した。詳しい経歴は不明であるが、調所改革時に京都詰役金方・見聞役を務めていた。妻は後に歌人として活躍する税所敦子（1825～1900）である。二人の結婚は弘化元（1844）年であり、『萬留』には啓四郎の京都滞在時には夫婦から世話になった旨が記されているものの、啓四郎がいつ文豹に入門したのかは不明であった。しかし、このほど木脇家文書の中に文豹が啓四郎に送った書簡が新たに確認されたことによって、二人の師弟関係成立時期をある程度絞ることができるようになった。

その書簡は新年の挨拶状である。年紀は未記載ながら内容から啓四郎が京都から江戸に下った翌年に文豹から出されたもの、すなわち弘化元年の正月と推察される。ここには二人が親密な関係であったことを窺わせる記述があることから、彼らの出会いは啓四郎が天保14年（1843）に初めて訪れた京都、あるいはそれ以前の薩摩の地においてと推察される。書簡で興味深いのは、文豹による絵画制作の指導に関する部分である。それは古画の修業のことや、茶器の写生は合作や席画に役立つといった内容である。さらに、啓四郎に「隅田川邊、上野邊、しのばすの池など」を写生することを勧めている。

文豹は四条派の松村景文（1779～1843）門人である。円山応挙の写生画から派生した四条派は粉本だけに頼らぬ実地の写生を重んじる。特定の場所を描くようにという指導は四条派の絵師らしいものといえよう。四条派から学んだ対象観察の姿勢は、後の武具や植物、魚介類、そして風景を写実的に描く啓四郎の絵画制作に活かされたと考えられる。（山西）

### 絵画以外の藝道修業

啓四郎はあまり武道のことについては触れることがないが、若いころには剣術（大刀流）、長刀、柔術を学んでいたことが『萬留』からわかる。一方、茶道は古流を、花道は池坊流を学んだ。『萬留』には啓四郎が枝ぶりの良い松や桜の枝をさがすために鹿児島近郊の山、さらには田布施、伊作といった薩摩半島の西海岸にまで足をのぼしたことが書かれている。松は春と秋と、琉球の使節が来る時には臨時に取りにいったようである。啓四郎は、師匠の松山隆阿弥（1792～1853）が伝授しただけで実作したこともないものも研究して極め、師から感心されたことを誇らしげに語っている。そして、複雑な花の知識や技を習得できたのも、絵の心得があったためだとしている。

啓四郎は自身が伝授された知識が後世に伝わらないことを恐れて、島津家（島津本家と玉里島津家）に生花図・立花図二巻を作って献上しており、これらは鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）に写しが、玉里島津家文書に正本と思われるものが現存する。（丹羽）



図2 | 税所文豹「山水図」

<鹿児島市立美術館蔵>



図3 | 「立花図」部分

<鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵>





## 甲冑製作と古器調査

其内、三ヶ国中の武器取調被仰付、三年に及で写方相済候処、順聖公御他界に相成、終に不用となる、其内、跡にて改る筈にて、御一門方以下、鹿児島内の神社等ハすべて蠟墨にてうつしとり格護相成候処、十年の役に烏有となる。しかし、残欠少々今に格護す。 —『萬留』—

啓四郎は若いころから、法元六左衛門から甲冑製作の技法を学んでいた（『萬留』）。啓四郎が初めて江戸の藩邸に詰めることになったのは天保14年（1843）であった。それはちょうど、老中水野忠邦による天保の改革が行われるとともに、アヘン戦争の情報がもたらされ俄かに軍備の充実が喫緊の課題となっていた頃である。家老の調所広郷の側近であった海老原清熙が、啓四郎を呼び寄せ、「外国船の侵入に備えて武器、火薬、兵糧の準備をしたが、甲冑の製造については未だ手配ができていない、そこで江戸の故実家に学び、習得後は鹿児島で製造にあたるように」と命じた。これにより、啓四郎は甲冑師の明珍家に通い、また有職故実を幕臣の栗原信充（1794～1870）に学ぶことになった。啓四郎は、足かけ6年、江戸に滞在し、弘化4年（1847）に鹿児島に戻る。上滑川の末川近江の屋敷の前の土地（現在の長田町5番地付近、360坪）に設立された甲冑製造所で、啓四郎は武具の製造の陣頭指揮を執ることになるのである。



図4 | 刀剣図 <鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵>

島津斉彬（1809～58）は、富国強兵策として西洋技術を積極的に導入し、近代工場群を別邸のあった磯の地に建設した（集成館事業）。その一方で、斉彬は曾祖父の島津重豪が命じた山陵調査・修復、あるいは領国の名所旧跡の調査を基にした『薩藩名勝志』の編纂、父斉興の時代の地誌の再調査に基いた『三国名勝図会』の編纂にならい、島津領国内の文化財の悉皆調査を行わせた。啓四郎は、領国中を巡回して各地の神社・仏閣の宝蔵等に収蔵されている神器（書画・陶器・甲冑・刀剣・弓矢など）を、藩の細工所の絵師とともに正確に写し取る作業を行った。

その淵源は、寛政の改革を主導した老中松平定信（1759～1829）が全国規模で行った文化財調査に求めることができる。文人としても名高い定信は、谷文晁（絵師）、屋代弘賢（幕府奥右筆）、柴野栗山（儒者）らに命じて、寺社の古物調査を行わせ、古器物を正確に写し取った絵図を十種類に分類して図録とし上梓したのである（『集古十種』寛政12年〈1800〉刊）。啓四郎の有職故実の師は栗原信充であるが、信充の師が屋代弘賢であることを考えると、斉彬の事業はまさに定信の文化事業の流れを汲むものと言えるだろう。

啓四郎が写し取り編集した図録は西南戦争のために焼失したというが、残っていればこの『集古十種』に匹敵するものとなったであろうと残念がっている。木脇家文書の中には兜や刀剣の真写図【図4.5】が今も残っているが、明治維新前後の廃仏毀釈、西南戦争や太平洋戦争のために多くの文化財が失われていった南九州の地にあっては、かつてどのような宝物が存在したのかを示す貴重な資料であることは言うまでもあるまい。（丹羽）

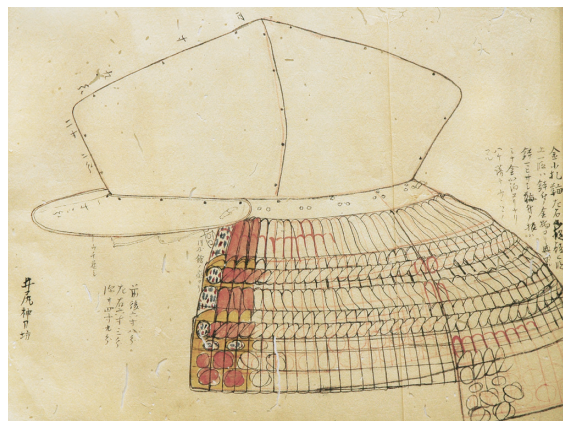


図5 | 「兜図集冊」より <鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵>



## 薩摩藩版の製作

……其後江戸詰被仰付候故、栗原先生江入門いたし、色々国論を相うごかし候処、<sup>りょうのこうぎ</sup>令講義の事をはなされ候故、是非上木にして天下に広めたく思ひ、……中山次左衛門氏は予が従弟にて、幸、久光公の御側役故、折々相嘶し上申いたし候処、終二御聞濟相成、……

—『萬留』—

久光公江歎願いたし候処、終に思召立有之、先生を御呼下し、二ノ丸にて御逢被遊、令之講義を御依頼相成、それより拙者も奔走いたし御着手相成る。それに付弟子丸呉橋・江口宗助（<sup>□□ハ</sup>絵師也）・中島白圭氏等、取調所二ノ丸御書院後の方へ御設ヶ相成、右人数出勤いたしたり。

—『啓四郎生涯の順序覚書』—

啓四郎は、18歳の頃、薩摩藩士村田源右衛門から教えられた栗山潜峰<sup>くりやませんぼう</sup>著『保建大記』（元禄2年〈1689〉刊）を読み、水戸学の尊皇思想に触れる。尊皇と尚古趣味、南朝最良は、明治維新後も変わることはなかった。

啓四郎が、師の栗原信充の著作を上梓し、広く世に知らしめようと思ひ立ったのは、幕末に流行した国学（平田派）が、出版を通じて思想を広く普及させようとしたのと軌を一にしている。当初は、栗原信充の『<sup>りょうのこうぎ</sup>令講義』<sup>しよくげんしゅうしき</sup>『職原抄私記』の出版を、島津一門家の加治木島津家に依頼をしたらしい。しかし、尊皇の立場をとるこれらの著作の出版は、幕府に対して遠慮ありとして断られたため、今度は啓四郎の従弟の中山次左衛門実善を通じて、藩主茂久（後に忠義）の父、島津久光に依頼した。学問好きであるとともに平田派国学に傾倒していた久光は、信充を江戸から呼び寄せ、信充の著作を薩摩藩版として出版することを命じるとともに、久光自身、信充の講義を受けたのである。啓四郎は文久3年（1863）11月27日に鹿児島を発ち江戸に赴き、信充らを伴って翌元治元年（1864）2月21日に江戸発、同年5月に鹿児島に到着している。

栗原信充が鹿児島に滞在したのは、元治元年（1864）5月～8月のことである。7月11日から17日には栗原信充、同寅次郎（信充次男）、同駒之丞（信充孫）、伊地知季安、中島白圭（信徴）、桐野孫太郎（鹿児島の町人で一行の宿泊所となった）らと霧島旅行を行う。7月14日、一行は天之逆鉾を訪れ、啓四郎がその真写図を作成、それに信充がその由来などを認めた文章を加えて一枚刷が作成された。啓四郎の記録によれば、久光は神代文字の版も作る予定であったという。

慶応年間に入って、出版事業は本格化する。久光は鹿児島城二の丸の御書院の後方に取調所を設置し、啓四郎、弟子丸弘喬（鹿児島上荒田出身）、江口宗助（蘇助、画名は暁帆）、中島白圭（信徴、信充の弟子）らに上記著作の編集を行わせたのであった。

また、その少し後、慶応3年（1867）12月には、小林郷（宮崎県小林市）に残る陰陽石の図（絵の左下に小さく「祐尚写」とある）と、関東太郎盛長（薩摩藩士、平田派の国学者）の文章を加えた一枚刷が作成され、頒布された。木脇家文書には、啓四郎が作成した原稿が残されている。清書の版下を担当したのは筆跡から中島信徴と推定される。上記の天之逆鉾と似た真写図と文章とからなる構成をとること、いずれも啓四郎が絵を担当していることから、これも久光の指示によるものと考えてよいであろう。当時薩摩藩内には、霧島山が天孫降臨の地であるという説が浸透していたが、その証しとしての聖なる遺蹟としてこれらのものが存在することを内外に示そうとしたものであろう。（丹羽）

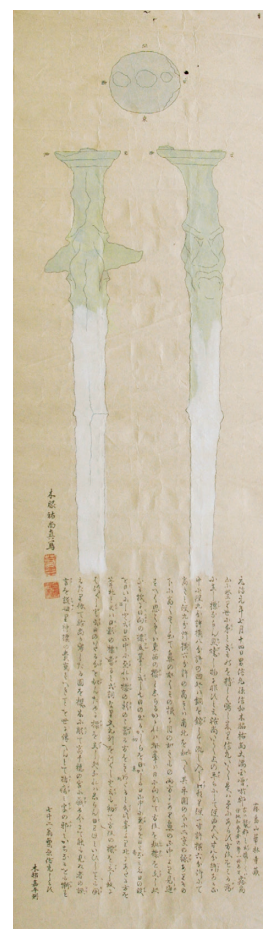


図6 | 「天の逆鉾図」  
＜鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵＞



図7 | 「小林郷陰陽石図」 ＜個人蔵＞



# III

## 近代日本と啓四郎

### 博覧会と啓四郎

明治維新の前年、慶応3年（1867）にパリで開催された万国博覧会に、薩摩藩が博覧会場の一区画を「琉球諸島王松平修理太夫」名で借り、幕府とは別に「薩摩太守政府」として展示を行ったことは有名な話である。実は、このパリ万博の出品物の中に、啓四郎が代表を務める甲冑製作所で作られたと思われる鎧が出品されていた（深港恭子氏のご教示による）。福山孝子氏が紹介されたパリ万博のフランス側の資料によると、出品品目について「KINOAKI KEISIRO, fournisseur de la Cour, à Kagoshima. - Armures défensives」（きのあき けいしろう 宮廷出入り商人 鹿児島 甲冑——訳は編者）とある（「1867年パリ万国博と薩摩覚書『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第9号、1979年）。啓四郎が渡仏したとの記録もないので、これは出品の製作（責任）者を表すものと思われる。幕末、すでに博覧会に関与している事実は注目に値する。

啓四郎が自身の履歴をまとめた留め書きによると、啓四郎は、明治4年（1871）6月15日、博覧会御用のため上京、7月1日から8月23日まで産物取調を行い、同24日から博覧会事務局出仕し、その後病気のために一旦鹿児島に戻ったことになっている。博覧会事務局が立ちあげられたのは明治5年1月のことであるので、この履歴には問題が残るが、博覧会事務局に出仕したのは確実で、当時、博覧会事務局には薩摩藩出身の町田久成（1838～97）がウィーン万博の準備に当たるとともに、博物館建設の構想を練っていた。啓四郎は維新前から町田家によく出入りしていたと思われ、久成は啓四郎とは早くから面識があり、東京に呼び寄せたものと推測される。

資料的に確実なのは明治5年4月11日から5月23日まで、都城県と美々津県（現在のほぼ宮崎県に相当する地域）の産物調査を、江夏干城、江口親雄（暁帆）、弟子丸弘喬とともにに行ったことである。啓四郎は動物、植物はもとより、古墳の出土品、風景などを写し取り記録している。その成果は、『日隅薩巡回採摘品彙図』<sup>にちぐうさつじゅんかいさいてきひん いそず</sup>（明治5年成、東京国立博物館蔵）として江夏干城の手でまとめられた（小濱亜由美「一資料紹介—東京国立博物館蔵『日隅薩巡回採摘品彙図』」、『九州産業大学芸術学会研究報告』第43巻、2012年）。同行者の顔ぶれをみると、江夏を除いて島津久光が藩版製作のために集めた人物と重なることが注目される（p.6 参照）。（丹羽）



図8 | 『日隅薩巡回採摘品彙図』  
（部分. トンボ）＜東京国立博物館蔵＞  
Image: TNM Image Archives

### 勸業政策と啓四郎

明治政府は、国家を挙げて産業の育成を重点課題として位置づけ、さまざまな政策を行った。鹿児島では、明治初年に開物社など会社組織を立ち上げるなど、旧藩の遺産を引き継ぐ形で近代化が進められていった。しかし、西南戦争が勃発し、鹿児島は戦場となったために多くの物的、人的な損害を蒙り、近代化は後退を余儀なくされた。鹿児島における近代化は戦後の「復興」を意味していた。一方で、木脇家からみると、版籍奉還・廃藩置県等の一連の改革は、他の多くの藩士同様、身分的・経済的特権の喪失ないしは縮小を意味した。さらに西南戦争後は、それまでの地方官（戸長や副戸長）としての職を得ることが難しかったこと（啓四郎は明治10年で還暦である）、また、薩軍に加わり出兵した藤次郎が定職を得ることも難しかったことも相俟って、収入の道をいかに確保するかが喫緊の課題となった。啓四郎は旧藩時代から製茶法の習得に関心をもっていたようだが、明治13年（1880）、息子の藤次郎を、製茶技術習得のために、京都宇治、静岡、埼玉の狭山等に出向かせた。藤次郎の帰省後、木脇家では一家を挙げて製茶に励んだ。啓四郎自ら、殖産興業の一翼を担ったのである。

ちょうどその前後、啓四郎は鹿児島県の勸業課の著作物の編纂に関わることになる。県下の煙草の生産・流通、農業事情を記録した『薩隅煙草録』（p.8 参照）と、明治16年開催の第1回水産博覧会の出品物として編纂された『覽海魚譜』である（p.9 参照）。

さらに、明治19年（1886）に啓四郎は沖縄県泉崎村にあった農事試験場に勤務する。沖縄県勸業課長の石澤兵吾<sup>いしざわひょうご</sup>の命を受け、『琉球漆器考』の絵を担当したり、『花草類真写図』<sup>かそうるいしんしやうず</sup>を作成したりしている。また、薩摩藩出身の田代安定<sup>たしろやすさだ</sup>に従って先島諸島や奄美大島の調査を行い、『南島雑話』の筆写などにも従事している（p.10 参照）。

明治10年代・20年代の啓四郎一年齢的には60代～70代—は、近代日本の産業育成のために、絵画を中心として貢献することになる。（丹羽）





さつぐうえんそうろく  
『薩隅煙草録』（青江秀著、明治14年〈1881〉刊、鹿児島県蔵版）

……農商務課長青江秀といふ有。此人、煙草録を書れたるが、拙者へ真図を書吳候様、  
無 扱被相頼候に付、国分、出水、指宿江差越取調の上、上梓被成、一冊五（円）位ツツにて、  
日本中は勿論、西洋各国迄も配分相成候由にて、拙者へも骨折せしとて一冊給りたり。今現存す。

—『萬留』—

『薩隅煙草録』は、明治政府の勸農政策を背景に、明治11年（1878）に県令岩村通俊の命で、鹿児島県勸業課臨時取調掛の青江秀（1834～90）によって編纂が開始され、明治14年に鹿児島県蔵版として刊行された。革装洋装本、696頁からなる大著で定価は5円であった。明治15年時、鹿児島県三等属の白野夏雲の月給が45円、同17年時加治木郡役所御用掛であった啓四郎の月給が8円であることを考えると相当高額であったことがわかる。本書は国分、出水、指宿を中心とする鹿児島県下の煙草生産地の記録であり、明治初期の煙草の生産、流通および当時の農業事情に関する重要な資料であるとともに、初刊本の用紙、印刷は日本の製紙、印刷史のうえでも貴重な資料とされる。啓四郎は、随所に配してある彩色の挿絵、全156図を担当している。



図9 | 『薩隅煙草録』第4図（右）、第5図（左）  
＜鹿児島大学附属図書館蔵＞



図10 | 『薩隅煙草録』第128図  
＜鹿児島大学附属図書館蔵＞

【図9】は煙草の花実を描いたものだが、花や実を単体で個別に描いており、種としての特徴をわかりやすく記録した西洋のボタニカルアートのような図で、西洋的な図譜の描き方を学んでいたことがうかがえる。

『薩隅煙草録』の挿絵には、対象をあるがままに写した、いわゆる真写真の他に、人物や風景、植物などを本文の内容に添うように構成し配置したものが散見される。たとえば、【図10】は、葉を運び、並べて夜露に葉をさらす煙草製造の一連の作業を示したもののだが、それが夜間であることを左頁の子供を背負った女性が月を指すことで表している。

また煙草の葉を原寸大で示した頁を折り込む装丁にしている他、4頁分の図をつなぎ合わせると一つの風景図になるという工夫もされている【図11】。もともとは一枚の絵で、それを4頁に分割にしたものと考えられる。近景の松をより大きく描くことで遠近を表す洋画の黎明期にみられる特有の描き方は、洋風画家司馬江漢の風景図を思わせる。

『萬留』での記述に、『薩隅煙草録』が日本中ではもとより西洋各国までにも配られた、とある。巻末には本文の内容が英文で要約され、挿絵にも英文表題が付けられている。国内外に紹介するための出版物に挿絵を描いたことで、彼の作品が県外に広がる結果となったことは、近代の時勢が画業にも反映したといえよう。（小濱）

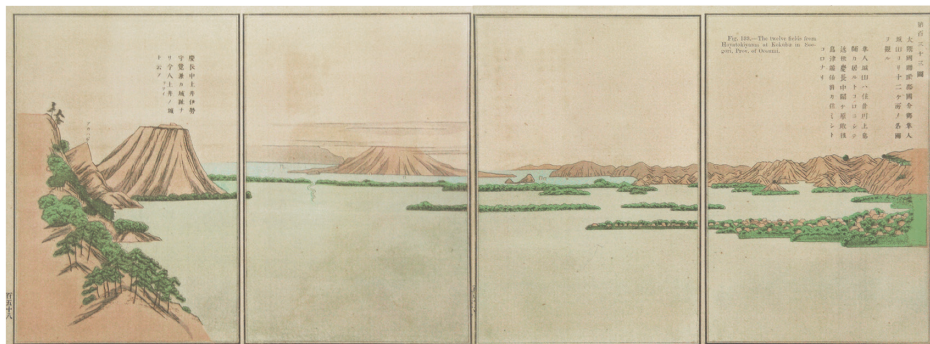


図11 | 『薩隅煙草録』第133図  
＜鹿児島大学附属図書館蔵＞

※図11は4頁分の図を画像編集でつなぎ合わせている。



げいかいぎょふ  
『**覺海魚譜**』（明治 16 年〈1883〉刊 鹿児島県刊）

同課長白野夏雲といふ人、魚類の真写を依頼に付、書方いたし候処、すべて是を額にして目  
今興業館内にかかげられり。予がかたみなり。  
—『萬留』—

『覺海魚譜』は、鹿児島県勸業課が県の勸業促進を目的に編纂し、明治 16 年（1883）に東京上野で開催された第 1 回水産博覧会に出品したものである。鹿児島県令渡辺千秋の命により、編纂者白野夏雲のもと、2 人の画師木脇啓四郎と二木直喜が作画した。鹿児島県勸業課が褒賞を授与されたものは『覺海魚譜』を含む計 6 点で、魚譜をはじめとする図書類の審査結果で最も高い評価である 3 等賞状が与えられた。「覺」とは鹿児島のことで、鹿児島の海に生息する海洋生物が描かれた肉筆彩色本と、モノクロの銅版の刊本（和装本）とが出品された。肉筆彩色本は、明治 16 年に鹿児島県立図書館所蔵本と水産博覧会出品本とが作成され、所在が明らかなのは前者のみである。

鹿児島県立図書館所蔵の肉筆彩色本『覺海魚譜』は、縦 29.5cm、横 39.6cm の画帖 3 冊で、344 図が収められている。その描写は精緻で写実性に溢れ、生き生きとした美しい彩色がほどこされている。

画師の作風や画法は、四条派や狩野派といった従来の薩摩藩の絵画の伝統を継承しながら、西洋の画譜や、そこで追求されているリアリズムの影響も見受けられる。刊本『覺海魚譜』の「緒言」と「凡例」に記されるように、シーボルトの『日本動物誌』魚類編を参照しており、画師たちが新来の博物図譜などを学び、新しい分野の作品に挑戦している様子がうかがえる。『覺海魚譜』は薩摩の伝統的な本草学や絵画を素地とし、併せて近代的な知識や技法を取り入れた魚譜であるといえる。

木脇家文書には、『覺海魚譜』メジナ図【図 12】の下絵と考えられる図【図 13】がある。【図 13】は、薄い和紙に墨線で描写したのち、裏から描画部分のみに胡粉（貝殻からつくられる日本画の白色顔料）が施されている。裏に胡粉を置くことで線を明瞭にみせつつ紙を補強するなどの効果がある。啓四郎の孫のひとり宇都宮貞子氏によると、「祖父（木脇啓四郎）は朝早く魚市場へ出掛けて行き、色々と魚を探し求め、やっと気に入った魚の写生が出来た時は大変に機嫌がよかった」（鹿児島県編『新編覺海魚譜』、1979 年）とあり、写生をもとに本絵（肉筆彩色本）に整えたことが推測される。伝統的な作画の過程として、写生から本絵にいたるまで、下絵など 2～3 の工程を経る。【図 13】は、本絵【図 12】と見比べ、細部の構造までも近似した描写の様子から、下絵の段階でも最終的なものであると思われる。ただ博物図は転写も多く行われていたため、すべての図が写生であるかは課題がのこる。

啓四郎は、『萬留』のなかで、勸業課白野夏雲から頼まれて描いた『覺海魚譜』について、額にして、現在興業館（鹿児島県立博物館旧考古資料館）内にて展示されているが自分の形見である、と記している。『覺海魚譜』の海洋生物を正確に「真写」する制作の基礎には、好奇心旺盛でその生涯で様々な職務につきながらも絵を描き続けたことや、藝道や甲冑製作、古器の調査研究、絵画、本草学・博物学など多分野で培った知識と技能がある。そのような伝統に基づく画技と西洋風の科学的描写法とが融合して成った 344 図の海洋生物の図は、単なる博物図を越えた美術作品といえる。（小濱）

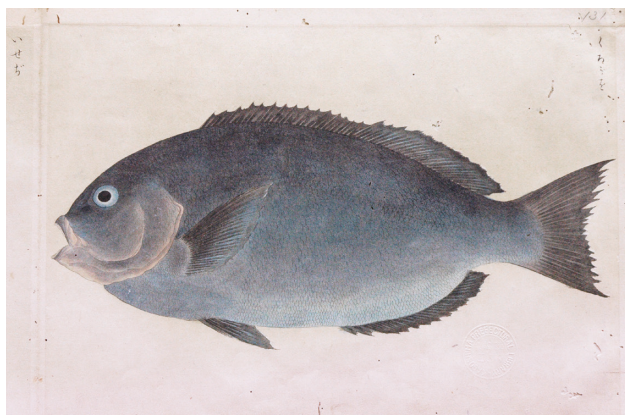


図 12 | 肉筆彩色本『覺海魚譜』メジナ (131図)  
＜鹿児島県立図書館蔵＞

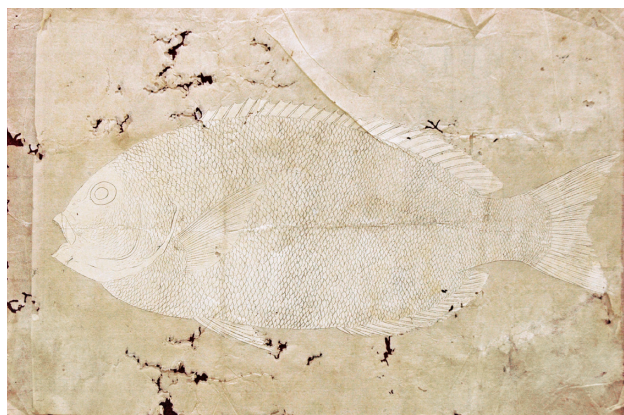


図 13 | メジナ図の下絵  
＜鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵＞





## 啓四郎と沖縄・奄美

啓四郎は、明治19年(1886)から明治24年(1891)までの6年間、沖縄県泉崎村<sup>こはぐら</sup>古波蔵の農事試験場(明治14年設立、国費経営)に勤務している。高齡(70歳)での啓四郎の沖縄勤務の経緯は未詳であるが、当時の沖縄県知事は鹿児島出身の大迫貞清<sup>おおさこさだきよ</sup>、また鹿児島県庁勸業課で勤務し1年間沖縄県庁勸業課へ出向していた田代安定<sup>たしろやすだ</sup>がいた。田代と啓四郎は、白野夏雲<sup>しらのかうん</sup>鹿児島県勸業課課長の元で博覧会関係業務を務め互いに関わりがあり旧識の間柄である。単身赴任の啓四郎と田代は、互いに心強い存在ではなかったろうか。なお、息子の藤次郎は、明治16年と明治30年前後数年ずつ沖縄に滞在し、日記や風景写真を残しており、明治期の木脇家にとって沖縄との関わりは深い。

啓四郎の沖縄滞在期を知る上で欠かせない人物が、沖縄県勸業課課長の石澤兵吾<sup>いしざわひょうご</sup>(1853～1919)である。石澤は、高齡ではあるがその写真図作成の実力は折り紙付の啓四郎への信頼も厚く、勸業振興や博覧会に関わる『琉球漆器考』<sup>りゅうきゅうしきこう</sup>【図14】や『花草類真写真』<sup>かそうるいしんしゃず</sup>などの琉球産物絵図を依頼している。

『琉球漆器考』は、石澤兵吾編集の琉球漆器の古文献。琉球王府時代の文書から漆器製造関係を整理し解説を加え、図案写しを啓四郎と佐渡山安豊(沖縄)が担当し明治22年(1889)10月に発行された。同時期、石澤に依頼され写真図作成を担当したのが『花草類真写真』(明治20年7月～明治23年4月、沖縄県立図書館蔵)である。いずれも第3回内国勸業博覧会で沖縄物産陳列を目的に作成されている。このように沖縄での啓四郎は、美術工芸や植物分野にその筆力を発揮している。その他には、農商務省水産局報告書『沖縄群島水産志』(明治22年3月刊行)の魚譜図作成、明治23年(1890)には『沖縄人物図』写本(鹿児島県立図書館蔵)も試みている。その他個人的に描かれた「牧港、首里、与那原風景」<sup>まきみなと しゅり よなばる</sup>「本部間切風景」<sup>もとまぎり</sup>「琉球国玉城城跡之図」【図15】などの風景画も残されているが、その全容を知るのはこれからである。



寛地二半製  
貝摺  
食籠



図14 | 『琉球漆器考』  
＜鹿児島県立図書館蔵＞

最後に、奄美と啓四郎との関わりに触れておこう。啓四郎は、文化14年(1817)、父の赴任(「島詰」)先であった沖永良部島で出生しており、奄美地方とは浅からぬ繋がりがある。明治18年(1885)夏頃<sup>なごやさげんた</sup>に、名越左源太がまとめた『南島雑話』の写本を、鹿児島県少書記と奄美大島金久支庁長を兼務する新納中三の依頼を受け作成している(明治19～22年6月、鹿児島大学附属図書館蔵『南島雑話』識語)。幕末の奄美を知る重要な資料『南島雑話』は、その後大正5年(1916)には、啓四郎(祐業)の島庁本を底本に鹿児島高等農林学校の教授であった小出満二が謄写し、さらにこれを基にして昭和8年(1933)に永井竜一によってガリ版刷が刊行されている。

明治24年(1891)春に6年間勤めた沖縄農事試験場を退職した啓四郎は、その年の5月に、田代安定と共に大島巡回に同行し奄美へ出向いている。沖縄での勤めを終え、初夏の奄美を旅する74歳の啓四郎の心情はどのようなものだったろうか。

近代日本の殖産政策に組み込まれていく早い時期の沖縄で、勸業行政担当の石澤や田代らと関わりを持ちながら、沖縄や奄美関係の絵を多く描いた木脇啓四郎は、近代沖縄史の中で沖縄出身の絵師と共に、記憶に留めたい人物である。(栗国)

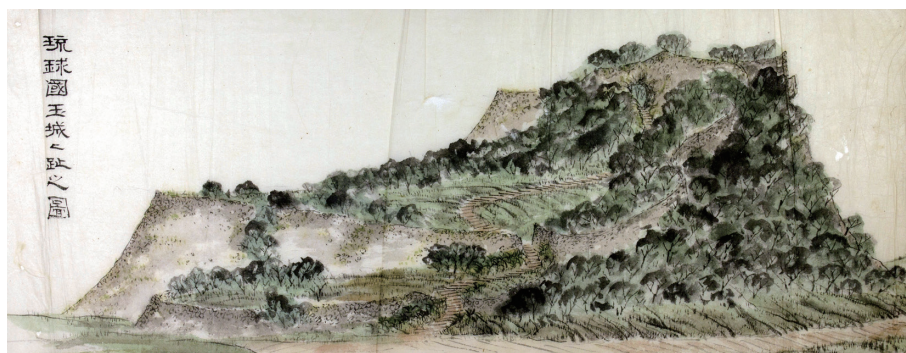


図15 | 「琉球国玉城城跡之図」＜沖縄県立図書館蔵＞



# IV

## 啓四郎の文化的営み

### —啓四郎が鹿児島に遺したもの—

#### 慶長之役合戦図屏風の復元

尚古集成館蔵の「慶長之役合戦図屏風」は、六曲一双の屏風に、豊臣秀吉による朝鮮出兵のうち慶長3年（1598）の泗川城塞における島津軍奮戦の様子を描いたもので、狩野派の絵師中島信徴（1836～1906）の制作になる。作者による箱書には以下の経緯が記されている。すなわち本図はもと明治24年（1891）に島津忠義の命によって木脇啓四郎に西南戦争で失われた島津家久由来になる同画題の屏風を新たに描かせようとしたものである。しかし同25年9月に啓四郎が眼を患ったため、信徴が後の制作を引き継いだ。明治30年の忠義の死によって制作は中断していたが、その子忠重の命により同36年（1903）12月に完成する。また、啓四郎の書き留めによると、啓四郎は明治24年11月に花岡島津家伝来の同屏風を写すことを思い立ち磯邸に伺ったところ筆写を命じられる。一通り完成するも右目を痛めたため、後を信徴に任せたとある。

これらふたつの由来記からわかるように、同屏風にはいくつかの原本となる作品が想定される。そのうち画像が確認できるのは『探元畫集』（大正15年発行）掲載の木村探元（1679～1767）筆「島津義弘公朝鮮征伐圖」（同画集掲載時は玉里島津家所蔵）と『都城古今墨蹟集』（昭和2年発行）掲載の永井慶竺（1685～？）筆「朝鮮之役屏風一雙」である。この2点は構図にいくつかの相違点があり、集成館本の構図は探元本のそれに似ている。『都城古今墨蹟集』掲載の屏風画中の書き込みによると慶竺本の原本となる屏風は「島津氏通翁」という、宮之城島津家当主で『征韓録』を編纂した島津久通（1605～1674）とおぼしき人物が描かせている。久通の祖父忠長は慶長の役に参陣して明軍大敗のきっかけをつくったとされることから、その武勲を顕彰する屏風絵制作の動機は強いものがあつたと推察される。また、第三代藩主島津綱貴の三男久儔（1687～1729）が自らそれを模写したという。綱貴の五男久方は宮之城島津図書久洪の養子となることから、久儔は弟の家に伝わる屏風を見せてもらったのではないだろうか。さらにその久儔本を都城島津家19代の久龍が享保4年（1719）、慶竺に写させたとある。注意すべきは久儔が享保9年（1724）に花岡の領地を拝領し初代当主となったことである。これは、啓四郎が花岡島津家伝来の屏風を写したという先の書き留めの記述と併せて興味深い。

ともあれ、「慶長之役合戦図屏風」は島津家の武勲と歴史を後世に伝えるための重要なモチーフを絵画化したものであり、基本的な構図を踏襲しながらいくつもの作品が描き継がれてきた。木村探元や永井慶竺という薩摩藩を代表する優れた絵師が本図の制作にあたっていることから、鹿児島における本画題の重要性が窺える。啓四郎がそのような屏風の模写を行った意義は、以上の事柄から推し量ることができよう。（山西）

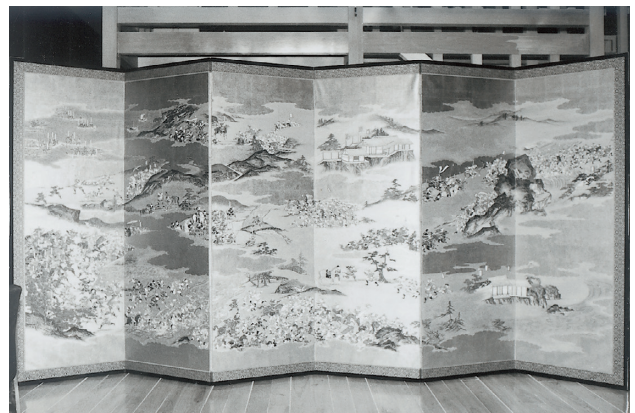


図 16 | 「慶長之役合戦図屏風」 <尚古集成館蔵>





## 啓四郎と中島信徴

折田年秀<sup>おりたとしひで</sup>（要蔵、1825～97）は幕末期に西郷隆盛らとともに国事に奔走し、維新後は楠正成の霊を祀った湊川神社（神戸市）の初代宮司となった人物であるが、明治25年（1892）の秋ごろから啓四郎と交流が密になり、啓四郎に旧薩摩藩の資料の写本を依頼するようになる。『折田年秀日記』によれば、同年10月9日、啓四郎に「虎狩之画」を依頼、同月22日にははるばる鹿児島<sup>さつ</sup>の唐湊にある啓四郎宅を訪い、古物を一見している。翌26年には、薩摩の国学者、白尾國柱が編集した奇談集『倭文麻環<sup>しづのおだまき</sup>』の挿絵を依頼している。これに対して啓四郎は、中島信徴に仕事を任せたようである。現在、信徴筆写の『倭文麻環』が鹿児島大学附属図書館に所蔵されている（ただし、折田のために仕上げたものかどうかは不明）。信徴は、啓四郎と同じく栗原信充の弟子であり（信徴の叔父で生野の変を起こした美玉三平<sup>みたまさんぺい</sup>も同門）、啓四郎と思想信条でも、絵画の面でも最も信頼の置ける人物と考えていたのである。（丹羽）

## 桜谷の景観と磯天神拝殿の格天井百草図の復元

鹿児島市吉野町にある菅原神社（磯天神）は、二代藩主島津光久の創建と伝える古社である【図17】。同社の南の谷は、古来「桜谷」と呼ばれ、桜の名所として文人墨客に親しまれていた。ところが、幕末、桜島沖の神瀬<sup>かんぜ</sup>に砲台を建設するため、同地の土砂が使われたため、桜谷は往時の景観を失っていた。それを憂えた啓四郎は、社掌の平田彦五郎の協力を得て、桜・楓の植樹を行い、同地の公園化を模索した。そのきっかけとなったのが明治26年（1893）7月の北白川宮能久親王の磯邸訪問であったという。南朝最良であった啓四郎は、後醍醐天皇の遥拝所の建築を思い立ち、和歌山県吉野の如意輪寺に同所の桜樹と後醍醐天皇の御影を依頼する。遥拝所は実現しなかったようだが、啓四郎76歳、老いて猶精力的な活動を続けたことが知られる。この時、啓四郎から歌を依頼された税所敦子が詠んだ歌は「波風<sup>おさま</sup>も納る御代の春にあひて磯山さくら咲やそふらん」であった。また、啓四郎が詠んだ歌「年毎に紅葉桜を植えて吉野竜田の山にまがゑん」からは、磯の地を「鹿児島の吉野・竜田」（桜と紅葉の名所）にしようという意気込みが伝わってくる。同じころ、傷んでいた同社の拝殿<sup>ごうてんじょう</sup>の植物図（百草図）を修復したのも啓四郎であった【図18】。（丹羽）

## その他の業績

江戸時代の薩摩焼に関する重要な資料のひとつ『薩陶製菟録<sup>さつとうせいしゅうろく</sup>』には啓四郎の証言が生かされている。さらに、明治17年（1884）から翌年にかけての加治木郡役場在勤中には、島津義弘<sup>しまづよしひろ</sup>の尊像の建立を計画し、義弘の伝記資料を「義弘公御一代記事蹟」としてまとめている。啓四郎の名は出ないものの、その内容は、大正7年刊の『島津義弘公記』（小牧昌業閣、加治木町義弘公三百年記念会）に受け継がれていった。明治25年には、松山三九郎から島津斉彬が側近の山口不及に贈った楽茶碗と和歌を見せられ、その形状を写し取り絵図として残している【図19】。また、このころ、自宅近くの新川右岸の湊橋付近で鉱泉（唐湊鉱泉）を発見していることも注目される。啓四郎はただの「文人」の範疇に収まる人物ではなかったことを示している。（丹羽）



図17 | 菅原神社（磯天神）拝殿外観



図18 | 菅原神社（磯天神）拝殿格天井

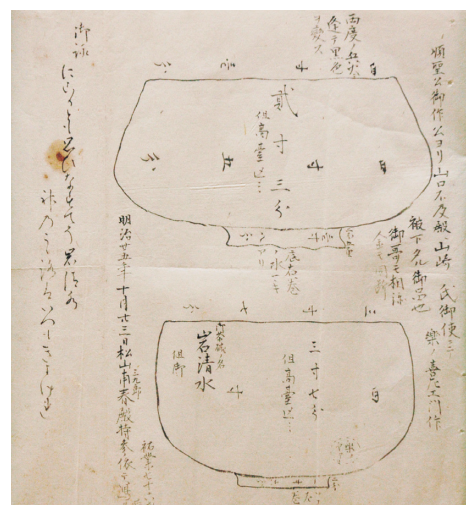
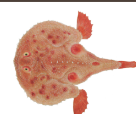


図19 | 斉彬楽茶碗図  
＜鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵＞





## 啓四郎と和歌

松元次右衛門時直氏ハ荒田郷中にて親敷交りし人なり。十七八の時うたをすすめ被成、読候を、一夜百首をよめり。題を盃一ツもり、それを取始めの夜は、拙者は、六ツから六ツに、百三十二首よみたり。……是より今に至り、題が出れば直にうかぶよふになりたり。…○松本氏、祐治氏、拙者三人にて、くり廻し宿を付、月二三度ツツ哥会を催せり。

—『萬留』—

松元治右衛門時直（1818～？）は、啓四郎と同じ上荒田郷中で鹿児島独特の地域教育を受けた、啓四郎の幼馴染である。『萬留』に「時直君ハ八田先生の直門人にてよみ方が上手なり」とあるように、薩摩藩の桂園派の歌人、八田知紀（喜左衛門、1799～1873）の門人で、『都洲集』巻末の名寄せにも名が見えている。啓四郎とは上荒田郷中の一年後輩に当たりますが、和歌に関しては一歩進んでいたようで、啓四郎に和歌の世界を知るきっかけを作った人物であった。啓四郎は『萬留』の中で、上荒田出身の川上甚左衛門親厚の名を挙げ、歌の添削を受けたことを述べている。ちなみに川上甚左衛門の師は公家の外山光実（1756～1821）である。八田知紀は歌の師として表記していないことから見ても、八田知紀の啓四郎への影響は間接的なものであったと推測される。啓四郎は八田知紀から絶賛されたとして、初めて富士山を見た時の歌、「大空のものとやいはん白雲の上に出たるふじの芝山」を挙げている。

上記の『萬留』の引用部分には、啓四郎が実際に行った歌の練習方法が記されており注目される。「十七八の時」とは、天保4、5年（1833～34）頃のこと。夕暮れ時から日の出時まで夜を徹して、百首以上の和歌を題に従って速詠することが行われたのである。老年になっても、同好の仲間が日を決めて毎月集まり、歌会を催していたようで、木脇家文書の中に明治期の歌稿が多数残っている。

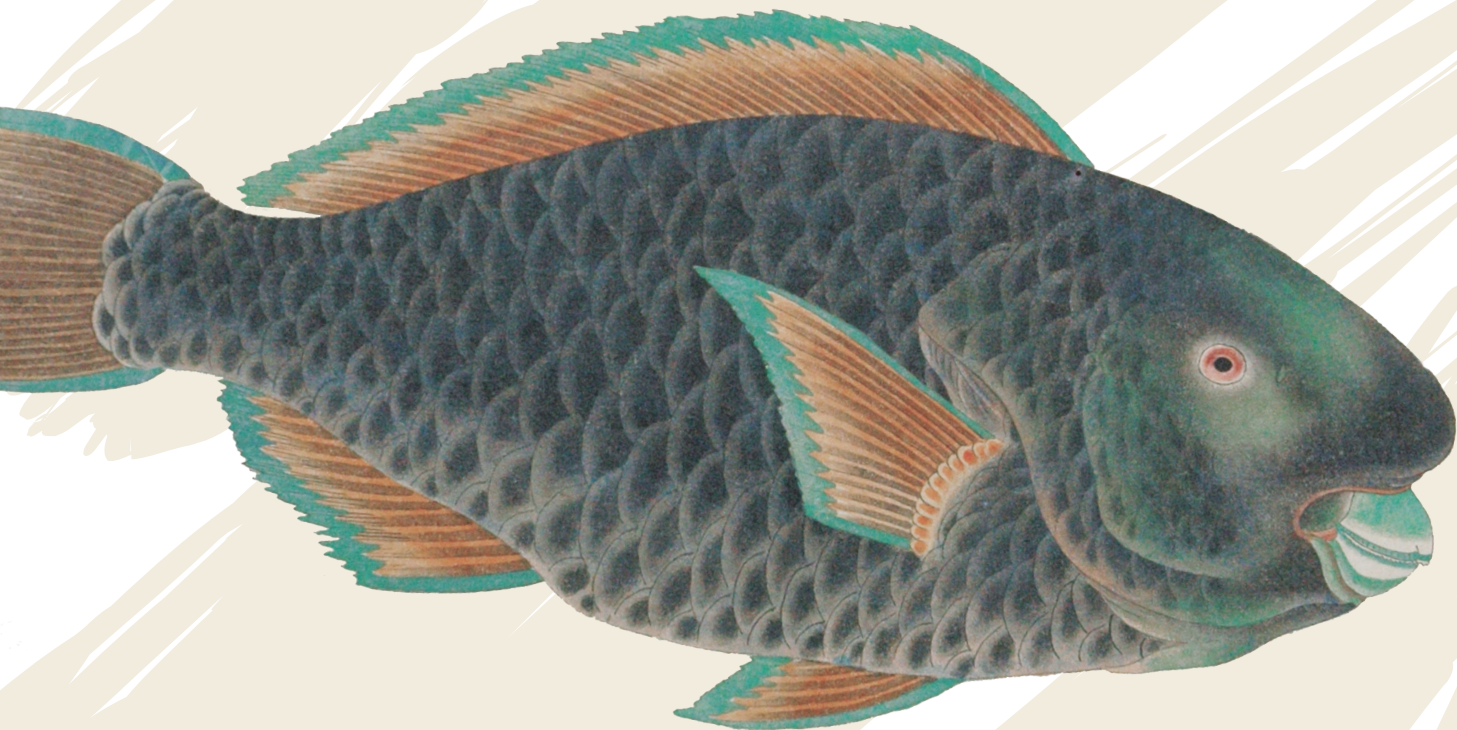
啓四郎は、自身の歌を集め一冊とし、『城平集』を名づけている。「城平」とは啓四郎の自宅のあった鹿児島唐湊の字である。鹿児島の歌壇は、高崎正風や黒田清綱など宮中の御歌所の歌人たちと強い繋がりを保っており、川畑梓、山口利雄らが中心となって明治後期まで定期的に編まれていた『鹿児島歌会』（明治35年の23輯まで確認できる）には、鹿児島出身の歌人に交じって啓四郎や木脇祐治らの歌が収録されている。

一方、啓四郎は、旧藩時代の鹿児島の名家の筆跡を「手鑑」として収集していた。長崎甚七、亀山甚之丞、須田傳弥、中原林左衛門といった薩摩藩の名筆家の軸（卷子本）や色紙、それに鹿児島の歌人たちの短冊が木脇家文書に多数伝わっている。これらの資料は旧藩時代の和歌史・書道史を知る上で貴重なものと言えよう。（丹羽）



図 20 | 短冊（左より、税所敦子、島津久徴（日置島津家当主）、末川周山（垂水島津分家当主）、近衛基前（近衛家当主））  
 < 鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵 >





鹿児島市立美術館・鹿児島大学附属図書館合同企画展  
木脇啓四郎描く

—幕末・明治の薩摩藩文化官僚の画業—

発行日 平成二十五年二月十三日

編・執筆  
執筆

丹羽謙治（鹿児島大学法文学部教授）

山西健夫（鹿児島市立美術館学芸係長）

栗国恭子（沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）

小濱亜由美（九州産業大学非常勤講師）

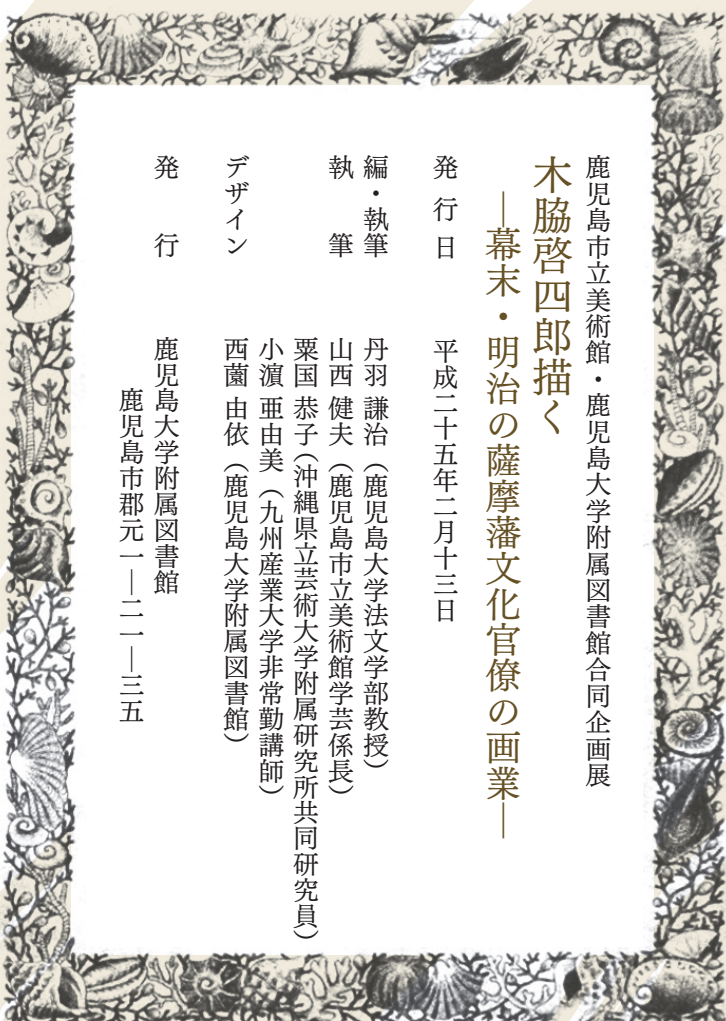
西薗由依（鹿児島大学附属図書館）

デザイン

発行

鹿児島大学附属図書館

鹿児島市郡元一―二一―三五



\*図録デザインに使用した図版は、鹿児島県立図書館蔵『甕海魚譜』、『沖縄人物図』、『琉球漆器考』、鹿児島大学附属図書館 木脇家文書等より  
\*展覧会会期：平成 25 年 2 月 13 日～3 月 31 日、於鹿児島市立美術館